

「さっきの魔法使いの指輪見た？ あれ、きつと竜石よね」

冒険者ギルドのカウンターで、目敏い同僚がこっそりとわたしに耳打ちする。先ほどアンデット系モンスターの討伐依頼を受注した若い女の冒険者は、そういわれて見れば薬指に不思議な虹色の光を放つ宝石をあしらった指輪をしていた気がする。

竜石、というのは討伐された竜がまれに落とす体内の魔力が結晶化した宝石のようなものだ。一般的に討伐が困難とされるドラゴンのなかでも、高位の魔力を持つものでないとドロップしないとされ、貴重なアイテムとして高値で取引される。大きさや質にもよるが、庶民であれば一生食べるに困らないくらいの値が付くものも少なくない。

「きつと凄腕の冒険者なんですな」

わたしがそう相槌を打てば、少し年嵩の同僚は呆気にとられたように目をぱ

ちくりとさせてから笑った。

「やだ、ちがうわよ。あの魔法使いさん本人は、そこまでランクの高い冒険者じゃないわ。でもお付き合してる恋人がそこそこの名知れた冒険者なの。きつと婚約指輪でもらったのね。あーあ、わたしも竜石とはいわないから指輪を送ってくれる素敵な恋人でもほしいわねえ」

同僚は茶目つ氣たつぷりにそうぼやきながら、依頼書の整理を始める。

「ところで、あんたにはいい人いないの？」

「え、わたしのことはいいじゃないですか。ほら、冒険者の方が並んでますよ」わたしは曖昧に答えを濁しながら、カウンターにできている列に向き直る。そうすると同僚は慌てたように案内を再開し、それ以上追及はされなかった。

ギルド前の案内板に掲示された張り紙をはがすのは、仕事終わりの日課だ。出勤前に明日のものへ張り替えなければいけない。

「届かないかも……」

うっかり脚立を持ってくるのを忘れてしまい、ぐっとつま先立ちになる。紙を押さえている押しピンに届きそうに届かず格闘していると、ぬっと影が覆いかぶさった。

「これを剥がせばいいのか？」

「う、うん」

ぶつきらぼうに問いかけられて頷けば、背の高い黒髪の男は黙々と紙を剥がす。ぐしやぐしやとまるめたそれを投げるように渡されて、あわててキャッチする。

「おい、それも貸せ」

「へ？」

わたしが抱えていた新しい紙の束を指さした。

「お前はちっこいから、オレが張った方が早い」

「ひどい、ちょっと気にしてるのに」

からかいまじりに手を差し出され、すこしむつとしたがおとなしく掲示物を差し出せばあつという間に張ってくれる。けれど大雑把に張られたのか、少し傾きが気になった。

「ねえもうちょっとまっすぐ張れない？」

「はあ？　　ったく細かいな」

アレンはぶつくさ文句を言いながらも、紙を貼り直す。それをチェックすると、少し傾いているような気もするが気になるほどではなくなった。

「ありがとうアレン」

素直にお礼を言えばにかつと歯を出して笑った男にすっぽりと抱きしめられ

た。

「ちよつ、ちよつと、こんな往来でやめてよ」

「はあ？ 危険なクエストを終えてきた恋人に冷てえな」

少し土埃の匂いがある大きな身体にすっぽりと抱きしめられて、ドキドキと胸が高鳴る。

「誰かに見られちゃうよ。ほかのひとに付き合ってるの言いふらすなってアレンがいったんじゃない」

「うるせえな、黙って抱きしめられてりゃいいんだよ」

「もう、勝手なんだから……」

抗議しながら身じろぎすれば、腕の力がさらに強まった。息苦しいほどに抱きしめられて胸が締め付けられるようにあまく疼く。アレンの体温をあじわっている、ふと袖に赤黒い汚れがついているのに気づく。

「アレン、怪我したの？」

「あ？」

「服、血がついてるじゃない」

わたしが乾いてこびりついた汚れを指摘すれば、アレンはきまり悪そうに頭を掻く。

「別に、こんなにかすり傷だ。それにもう臨時でパーティー組んでたやつに直してもらったから傷はもう塞がってる」

「……臨時でパーティー組んでる人って、あの治療師の女の人だよな」

アレンは基本的に単独行動の冒険者だが、それでも高難易度のクエストに挑むときは仲間を募ることがある。今回組んでいたのは美人の回復術の使い手で、しかも凄腕で評判だ。彼女に掛かれば魔物に致命傷を負わされても、傷跡一つ残らないという。

「なんだ、嫉妬してんのか？ 別に二人だけじゃねえ。魔法使いのジジイや罨外しの盗賊のオッサンも同じパーティーだったろ」

「それは、そうだけど……」

わたしはもごもと言ひ淀む。自分でも子どもじみた嫉妬だとわかっているからだ。わたしはただのギルドの受付嬢で、魔法や剣技は使えないからモンスター退治やダンジョン探索についていくことはできない。だからアレンが危険な時に側にいれないし、助けてあげることもできない。それで勝手に落ち込んでモヤモヤしているんだ。

俯いて黙り込んでしまったわたしに、袖をまくり上げて腕を見せる。筋張った腕を触って傷口を探すわたしがおかしかったのか、アレンが嘔き出す。心配しているのにバカにされた気がして眉を寄せれば、頬を優しく撫でられた。

「ほら、もうなんともない。だからそんなしよぶくれた顔やめて、いつも通り

笑ってくれよ」

そういつてアレンは歯を見せながら笑って、わたしの顔を覗き込む。だんだん近づいてくる男らしい整った顔に、ゆっくりと目を閉じようとした瞬間、甲高い女の声が響いた。

「あれ、Sランク冒険者のアレンさんじゃない？」

「本当だ、こんなところでなにしてるのかしら」

女性二人の声は、だんだんとこちらに近づいてくる。このままじゃ、わたしたちが付き合っているのがバレてしまう。

アレンは慌てるわたしを隠すようにギルドの裏口に押し込み、鍵を閉めた。

「はあ、危なかったな」

「……うん」

心からほっとした顔をしているアレンに、わたしはモヤモヤする。

もしわたしがアレンと肩を並べられる冒険者だったら、堂々と彼女として周りに紹介してくれるのかな。

アレンと付き合ったのは、受付でガラの悪い冒険者に絡まれていたのを助けてもらったのがきっかけだった。お札にと食事に誘ってから、強面なのに案外とつつきやすくてぶっきらぼうだけど優しい人で、いつの間にか好きになっていた。告白してくれたのはアレンの方だったけれど、もしかしたらわたしと付き合ったことは何かの間違いだったのかも。デートはもっぱらどちらかの家で過ごして、二人きりで外に出かけることはめったにない。

もしかして、わたしばかり好きなのかな。

一度そう考えると悲しくて、連鎖的に不安が湧いてくる。

「なあ、今日お前の家行っている？」

腰をいやらしく撫でさすられて、びくりとカラダが震える。流されそうにな

る自分を叱咤して、首を振った。

「……ごめん、今日は疲れてるからまた今度にしない？」

「は？」

少し低い声にどきりとしたけれど、ここであなずいてしまったらいつもと同じだ。それに高難易度のクエストを成功させたあとはダンジョンでの興奮を引きずっているのか、朝まで離してくれずに何回も抱かれてしまう。

「アレンだってクエスト疲れたでしょ。だから今日はお互いにゆっくりしよう。ね？」

「……なんでだよオレはずっとお前に会いたかったのに」

アレンは納得できないのか、拗ねたような声を出す。

「ほら、もう離して。ちょ、ちよっと」

わたしは身をよじるけれど、アレンは腕を解いてくれない。ずっといやらし

く腰を撫で続ける。

「ちょ、ちょっとお」

久しぶりの熱にきゅんっとおなかの奥が疼く。断らなきゃいけないのに、思
い出してしまう。何度も何度も求められて、熱い肉杭でおマンコズポズポ♡っ
てされて大きく張り出した雁首で弱いところズリズリ擦られて奥をしつこいく
らいにトントン叩かれる。思い出しただけで、ショーツのなががぬかるんでし
まってこっそりと湿った息を吐きだす。

「っ、アレン、はなして……」

「はなして？ 顔赤いぞ。オレに抱かれたの思い出して興奮したんじゃないやねえ
の？」

腰を撫でていた手をゆっくりと下げて、双丘をむにゆりと揉みしだかれる。
お尻を軽く左右に広げられながら、指を食い込ませてもにゅもにゅと揉みしだ

かれるとぞくぞくっ♡と背筋が粟立つ。

「ふっ♡やっ♡おしりっ、もまないでっ♡」

「はは♡相変わらずいい尻。安産型だな♡ここにオレのチンポ擦り付けてやるの考えたら興奮してきた」

引き寄せて抱きしめられると、ごりっ♡と硬くて熱いモノが布越しにおなかへ擦り付けられるのがわかる。おもわず物欲しげに腰が揺れれば、耳元で笑われた。

「っ、でも、ここじゃ、だめ」

「わかってる。ちゃんとお前の家まで我慢してやるよ♡」

戸締りを済ませ、職場からほど近い場所に借りている部屋へ帰る。ドアを締めた瞬間、背中から抱きすくめられた。

「あっ♡」

「会いたかった……。他の奴らがいるとろくに抜けねえし、このデカパイ揉みしだく妄想ばっかしてたぜ」

おっぱいをもちあげながらたぶたぶ♡と軽く揺さぶられて揉まれる。首筋に顔を埋められてスンスン♡と嗅がれて、お尻にはもうガチガチに勃起したチンポを擦りつけられてる♡

「ひ、どい♡こんな帰ってきたばかりなのに、こんなに盛るなんて」

「はあ？ よくいうぜ♡ケツ振ってオレのチンポに媚びてるくせによ♡」

無意識にお尻を振っておねだりしていたのを指摘されて、かあっと頬が熱くなる。触れ合えなくて寂しかったのはアレンだけじゃない。ぺろんとワンピースの裾をまくられる。

「ほら、自分で持ってる」

「——♡」

めくられた布を自分で持ち上げる。いやらしく媚びているような格好にドキドキしてきゅんっ♡とおマンコがぬかるんでしまう♡

「は♡かわいい尻♡」

もにゅもにゅ♡といやらしく揉まれてから軽くぺちり♡と叩かれる。バックでするとき、何度もふざけて叩かれたから条件反射で興奮するようになってしまった♡

「あ♡♡」

カチャカチャという金属音がして、ヒクヒク♡と物欲しげにひくつく肉土手をぐにっ♡と拡げられる。ぴとっ♡と熱くぬめったものを当てられて、愛液がどろりと垂れてきた。

「お♡ロザリーのマンコも準備できてるじゃん。オレがないときここ自分でかわいいがってたのか？」

ひくひく♡と震えるおマンコにゆっくりと指がねじ込まれる。ゴツゴツとした指がマン肉をこそげば、肉壺が勝手に喜んでちゅうちゅう♡と指にむしゃぶりついた♡

「はは♡とろとろじゃん♡さすがオレ専用のエロマンコ♡」

二本の指でマン肉を広げながらかき混ぜられれば、おなかの奥が甘くしびれ始める。粘膜の凹凸をこそぎながら指でほぐされるの、きもちいい♡でも、もつときもちいいのがあるって知ってるからこれじゃ満足できない♡

「や♡ゆびじゃ、やあ♡もっと、かたくて、あついの♡ほしいの♡」

「へえ？」

ちゅぽんっ♡と指を引き抜かれたら、喪失感におマンコが切なく収縮する。後ろを振り返ってアレンを見たら、ニヤニヤと笑っていた。ぴとりとチンポをおマンコに添えられる。でも、ゆるゆると腰を動かすだけで挿入れてくれない

い。

「も、いじわるっ♡」

手を出してくれない恋人に、おマンコが我慢できなくなって自分からチンポにおマンコを擦り付ける。お尻を前後にふって、ふうふう荒い息を吐きながら熱い肉杭に粘液を塗りつけて媚びる。雁首に勃起したクリトリス擦り付けるの、きもちいい♡

「ふっ♡アレンのチンポっ♡あっつい♡もうガチガチ♡」

マン肉を擦り付ければ先走りと愛液が混じってぐちょぐちょ♡と卑猥な音が響く。興奮しながらも頭の片隅で、家に帰ってすぐにセックスなんて、都合のいい女みたいだなと自嘲するけどカラダの熱は引かない。お尻を振りながらマン肉で挟み込んでズリズリ♡とすれば勃起したクリトリスを押しつぶしてふうふう♡と荒い声が漏れてしまう。

「お前のエロ声久しぶり聞いたらめっちゃチンポに効く♡自分でケツふって媚びてたまんねえな♡ほら、そんなに挿入れてほしいならもっとかわいくおねだりしてくれよ♡」

ずりゅっ♡ずりゅんっ♡とチンポを押し付けられると、クリトリスに痺れが走って頭がどんどんぼうっ♡としていく。さっきまでぐるぐる考えてた漠然とした不安が快感でかすんで、はやく気持ちよくなりたいという欲求に塗り替わっていく。

「はっ♡しゅごっ♡アレンのっ♡挿入したいっ♡これでおマンコ突いてえ♡」
おマンコを左右にぐい♡とひらき、雁首を入口でちゅぽちゅぽ♡としやぶる♡マン肉が広げられる感覚に腰が震える♡

「くっそ、お前エロすぎ♡付き合っすぐのころはベッドじゃないとセックスできないっていやがってたのにな♡」

がっしりと腰を掴まれて、お尻を揉まれながらアレンへと引き寄せられる。ずぷっ♡とカリの部分で入口をねっとりいいじめられながらおっぱいを揉みだかれる。

「あ♡」

「お、締まった♡お前バックでマンコいじめられながらおっぱい虐められるの好きだもんな♡」

たゆんと震えるおっぱいを寄せられてから、先端をやさしくなぞられる。ガチガチのチンポにキスするおマンコの締めまりが、もつとよくなっちゃ♡

「ふっ♡ふうっ♡もっ、おくまで挿入れてっ♡」

「まったく、もう我慢がきかなくなったのかよ♡かわいい彼女におねだりされたら断れねえなあ♡」

唇の片端だけ上げてからアレンはわたしの腰をがっしりと摘まんで、一気に

引き寄せる。久々の肉杭に、媚びるようにおマンコが絡みついておしゃぶりしてしまう♡

「あ♡♡あ♡♡」

「は♡ロザリーのマン肉、オレのチンポに媚びてるぜ♡かわいいな♡こんなに熱烈に歓迎されたらちゃんときもちよくしてやらないと悪いよなあ？」

肉芽を裏側の気持ちいい場所を抉られながら腰を打ち付けられると、奥があまり痺れていく。太ももがビク♡♡と震えて、感じてるのがバレてしまう♡

「は♡すっげえエロマンコだな♡挿れられただけでもうきもちいいのかよ♡」

きゅ♡♡きゅ♡♡と乳首を指で転がされながら、バックでとんと♡♡とリズムカルに腰を叩きつけられる♡久しぶりのエッチなのも相まって、一突きされるごとに濁った声が出てしまう♡

「お♡おマンコとんと♡♡ってしゅるの♡♡すごい♡♡」

むっちりしたマン肉の凹凸をチンポがゴリゴリ擦っていくたびに、全身がビリビリする♡

「はは♡ロザリーのマンコめちゃうねってる♡搾り取られちゃう♡お前のマンコもおかえりっ♡って歓迎してくれてるんだな♡」

ごちゅっ♡とひときわ大きく腰を突き出されて、おマンコが痙攣して軽くイってしまう♡太ももがガクガク♡と震えて、潮をぶしっ♡とお漏らししてしまう♡♡

「あ♡あ♡あ♡」

「ははっ♡もうイっちゃったのか♡よわよわマンコだな♡」

ひくつくおマンコの感覚を楽しむように収縮する蜜肉のなかで肉竿がゆつくりと円を描く。いったばかりのおマンコをかき混ぜられて、また軽くイってしまっ♡た♡♡

「おっ♡おっ♡だめっ♡イってるのにいつ♡」

「わりい。でもロザリーはイってる敏感マンコトントンっ♡ってされるのすきだろ♡それともこのでかパイ弄られたいか？」

おっぱいを寄せるように揉みしだかれたと思うと、固く尖った乳首を根元から先端までシコシコ♡と抜かれる♡乳首、よわいのに♡イったばかりの敏感なカラダでいじくりまわされたら、またおマンコ締め付けてしまう♡

「ほら、またしゃぶりついてきたじゃねえか♡絶頂痙攣マンコオレのチンポ抜いてくれよ♡」

ずろお♡とチンポを引き抜かれると、出来上がったおマンコが名残惜しそうに締め上げる。低いうめき声が色っぽくて、それだけでまた子宮がきゅんっ♡と疼く。

「そんなに名残惜しそうにしないで、でもまたすぐ挿入れてやるっの♡」

ギリギリまで引き抜かれてから勢いよく腰を打ち付けられると、子宮口を押し上げられて目の裏でパチパチ♡と火花が散った♡

「あゝゝっ♡いったばかりのおマンコにそれだめっ♡よわよわおマンコにそれされたら腰ぬけちゃう♡♡」

足の筋肉がひとりでにピンっ♡と引き延ばされて勝手につま先立ちになる。立ってられないほどもちいいのに、アレンの腰振りは止まらない♡

両腕を掴まれてぐい♡と引っ張られればお尻だけ突き出した体勢になる。ただでさえぐっぽりとハマっていたチンポがさらに奥へ入り込んで、勝手に喉が開いた。

「おっ♡おおゝゝっ♡」

快楽にのまれた獣みたいな声でヨがれば、媚肉のナカのチンポがムクムク♡と大きくなる。わたしのこんな下品な声で興奮してるんだと意識したら、また

おマンコがイク準備はじめてしまう♡

「っ♡ぐっ♡ザーメンおねだりするみたいに締めたりやがって♡お望み通りに
ちゃーんと奥で出してやろうな♡」

たんたん♡とポルチオを押し上げられると、瞼の裏でパチパチ♡と火花が散
る。子宮口をガチガチの勃起チンポでノックされたら、もう降参するしかない

♡

「あ♡あ♡いっグ♡ずっとイってりゆのにい♡おっきいのくりゅっ♡」

「すごっ♡イキっぱなしじゃねえか♡たっぷり溜めたザーメン全部注いでやる
からしっかりうけとめろよ♡」

子宮が下がり切ったところに容赦なく、膨れ上がった亀頭が叩きつけられる。
ごちゅんっ♡とポルチオにはまり込んだそれをさらに奥へ入れ込むようにぐり
んぐりん♡と腰を回される。

「あ♡ひぎゅっ♡それっ♡はいっちゃんいけなところはいってりゅっ♡」

射精寸前の亀頭がぷくっ♡と膨らんで、子宮の入り口に侵入する♡

「ら、めえ♡中出しやあ♡」

きゅんきゅんと疼く子宮に抗うように叫んでも、力強いピストンはとまらな
い♡何度イったのかわからずにハメ潮を噴くおマンコで必死に抵抗する。

「や♡あ♡赤ちゃん、できちゃうっ♡」

「いいじゃねえか、お前に似たら絶対かわいいぞ♡な、ちゃんと責任取るから
よ♡」

膨れ上がった肉棒がビクビク♡と脈打ち、熱い奔流が解き放たれる。びゅー
びゅーっ♡といつもより長い射精♡全部子宮に飲み干させるように根元まで肉
棒を押し込んだままぐりぐりと腰を回されたら、膝がガクガク♡と笑い始め
た。

「あ♡やあ♡あついでりゅっ♡ああ♡」

「ほら、しっかりこのかわいいマンコでゴクゴクってゼーんぶ飲んでくれよ♡」
最後の一滴までおマンコのナカにぶちまけられると、膝が崩れ落ちそうになる。ちゅぽん♡とチンポが抜けたのと同時に床に座り込みそうになったわたしをアレンが抱きとめてくれた。

「あへ♡も♡ぜんぶだすなんてひどいっ♡」

「ひどい？　ちゃんと気持ちよかっただろ？」

いった余韻でピクピク♡と痙攣するおマンコにふとい指を挿入られてぐりぐり♡とかき混ぜられながら悪い顔で微笑まれると、顔が赤くなってなにも言い換えなくなる。

「今度はベッドで、もう一回やろうぜ？」

「も、もう……♡」

あれだけ出したのにもう硬さを取り戻したチンポを太ももに擦り付けられて、わたしはドキドキしながらうなずいてしまう。

こんなこと、いつまでも続けていいわけがないのに結局今回も流されてしまった。